

竹田貴雄の「からだところと人間関係に効く漢方講座」

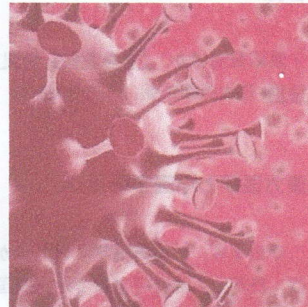
第9回 新型コロナウイルスへの漢方【前編】

コロナへの「治る力」に作用する漢方薬の選び方

2020/05/08

竹田 貴雄（北九州総合病院麻酔科部長）

日本での新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行が止まりません。著名人の訃報も伝えられる中、4月7日に7都府県を対象に、4月16日には全国を対象に、改正新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく初の「緊急事態宣言」が発出（発令）されました。感染爆発を回避し緊急事態を終息させるため、他者との接触を8割減らす、マスク着用・手洗い・消毒など、様々な感染リスク低減策が実施されていますが、今後の見通しが立たない状況が続いています。



本連載の第8回（コロナに負けない！気晴らしの漢方「柴胡剤」）では、コロナ禍の中で、不自由な生活を強いられる中でメンタルヘルスをどう保つかというお話をしましたが、今回は、COVID-19に対する漢方治療について取り上げます。

漢方薬は身体の「治る力」に作用する

そもそも漢方薬には、細菌やウイルスを殺す作用はありません。漢方治療はウイルスそのものではなく、ウイルスを攻撃する生体防御能を向上させることを目的とします。細菌やウイルス感染により、人が生き延びていくために必要な身体システムが不調を起こしたとき、身体の「治る力」に作用するのが漢方薬の役割です。どのように「治る力」に作用するかというと、概ね以下の4つに分けられると考えられます。

身体システムの不調と漢方薬

（1）免疫を高め、炎症を抑える

COVID-19で引き起こされる主な病態です。漢方薬は免疫賦活薬・抗炎症薬として、免疫系に介入して一早く免疫システムを立ち上げます。炎症の役目が終わると、漢方薬は過剰な炎症を素早く鎮め、荒廃した組織を修復します。補剤（ほごい）や麻黄剤（まおうざい）は免疫系を活性化し、柴胡剤（さいござい）や清熱剤（せいねつざい）は過剰な炎症を抑制します。

（2）循環障害を改善

動脈系と静脈系の間にある微小血管の循環障害（瘀血：おけつ）があれば瘀血血剂（くおけつざい）で循環を改善し、血が足りない（血虚：けっきょ）ときは補血剂（ほけつざい）で補います。

（3）水分の分布を正常化

水分の分布異常（水滞：すいたい）があれば、利水剂（りすいざい）で余った場所から不足した場所に水を移動させ、水不足（陰虚：いんきょ）がひどければ滋陰剂（じいんざい）で潤します。

（4）冷え（熱産生障害）の改善

加齢、運動不足などで褐色脂肪細胞が不足し、深部体温が下がった場合、麻黄（まおう）や附子（ぶし）や乾姜（かんきょう）で身体を温めます。

COVID-19に対する中医学診療ガイドライン

COVID-19に対して中国では、西洋医学的な治療とともに中医学（中国伝統医学）での治療も行われています。中国政府は3月3日に国務院通知として、「新型コロナウイルス肺炎診療方案（新型コロナウイルス肺炎診療ガイドライン）第七案」を発表し、中医治療の詳細なガイドラインを示しています。日本でも、このガイドラインに関する報告が日本感染症学会のウェブサイトなどで公開されています。

・小川恵子. COVID-19感染症に対する漢方治療の考え方（改訂第2版）. 日本感染症学会特別寄稿.

・有田龍太郎ほか. 中国における COVID-19 に対する清肺排毒湯の報告. 日本感染症学会寄稿.

・渡辺賢治ほか. 【緊急寄稿】新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に対する漢方の役割. 日本医事新報. 2020;5008:44

漢方医学と中医学の違い

そもそも、「漢方医学」（＝漢から来た医学）とは、日本から見た呼び方です。中国では自国の伝統医学のことを漢方医学とは呼ばず、「中医学」（＝中国伝統医学）と呼びます。中国で使われている治療薬（中医薬）と日本で使われている治療薬（漢方薬）は、別体系の医学から創薬されており、中医学では日本漢方にはない生薬が使われていたり、処方名が同じでも構成生薬が異なっていたり、大量の生薬が使われていたりします。中国と日本では気候が異なり、国民の体質にも差があるためです。



（例）補中益氣湯（ほちゅうえっきとう）の構成生薬：中医学は日本漢方の約3倍量の生薬を用いる

中国では

「人参（にんじん）10g、黄耆（おうぎ）15g、朮（じゅつ）10g、陳皮（ちんぴ）6g、甘草（かんぞう）5g、当帰（とうき）10g、柴胡（さいこ）3g、升麻（しょうま）3g、生姜（しょうきょう）不使用、大棗（たいそう）不使用」

日本では

「人参（にんじん）4g、黄耆（おうぎ）4g、朮（じゅつ）4g、陳皮（ちんぴ）2g、甘草（かんぞう）1.5g、当帰（とうき）3g、柴胡（さいこ）2g、升麻（しょうま）1g、生姜（しょうきょう）0.5g、大棗（たいそう）2g」

漢方でCOVID-19の感染予防

漢方医学では病気の前段階のことを「未病（みびょう）」と呼び、「未病の治療」が最も重視されています。新型コロナウイルス非感染者および無症状病原体保有者は、漢方医学的には「未病」に当たるため、漢方医学が得意とする領域となります。

まず、生体防御能＝「氣」を益すためには、日々の「養生」が何より大切です。普段以上に快食（身体を冷やさないように冷たい飲食物を避ける・暴飲暴食を避けるなど）・快眠（睡眠時間の確保）・快便（便秘を避ける）を心がけた上で、漢方薬としては補剤（ほざい）を内服します。

【補剤（ほざい：エネルギー補給）】

- ・補中益氣湯（ほちゅうえっきとう）
- ・十全大補湯（じゅうぜんたいほうとう）
- ・人参養榮湯（にんじんようえいとう）
- ・加味帰脾湯（かみきひとう）

これらの補剤は、構成生薬に

- ・人參（にんじん）：朝鮮人參、氣（エネルギー）の原料
 - ・黄耆（おうぎ）：からだの傷を修復し、エネルギー漏れを防ぐ
- を含む、参耆剤（じんぎざい）と呼ばれるシリーズです。参耆剤は「スーパー補剤」として、免疫能の低下している膠原病患者や癌患者、高齢者をはじめ、医療崩壊を防ぐため過労・睡眠不足・ストレスにさらされている医療従事者をサポートします。

補中益氣湯は、本連載の第3回（[なぜやインフル予防に「補中益氣湯」がおススメ](#)）でご紹介した漢方薬です。COVID-19に負けないからだ作り、ストレスに負けないところ作りにおススメの「漢方エナジードリンク」です。参耆剤の仲間には、氣を補う補中益氣湯の他、氣と血の両方を補う十全大補湯（じゅうぜんだいほうとう）、人參養榮湯（にんじんようえいとう）、加味帰脾湯（かみきひとう）があります。使い分けは、

【氣を補う】

- ・補中益氣湯

【氣と血を補う】

- ・横隔膜より頭側（呼吸器）に症状がある場合：人參養榮湯
- ・横隔膜より尾側（消化器）に症状がある場合：十全大補湯、加味帰脾湯

となります。人參養榮湯と十全大補湯には地黄（じおう）が含まれており、飲みにくいことがあります。この場合、地黄の含まれていない加味帰脾湯や補中益氣湯がおススメです。

ウイルスの増殖を防ぐための重要なサイトカインに、インターフェロン α があります。インターフェロン産生経路は複雑で、産生までに数日かかります。体内でのウイルスの増殖速度とインターフェロン α 産生速度によって、重症化するか治癒に向かうかが決定されるため、いかに生体防御機能が早く働くかが重要な鍵となります。インフルエンザウイルスを使ったマウスの研究では、感染前に補中益氣湯や十全大補湯を投与することで、インターフェロン α 遺伝子の発現誘導に関与する分子（IRF-7）の産生が促され、感染が起こった際にすぐにインターフェロン α が産生できることが報告されています。

渡辺賢治氏の研究によると、補中益氣湯には他にも以下のような作用があります。

- ・インフルエンザウイルス粒子に結合して複合体を形成し、細胞への侵入を抑制する
- ・細胞内ストレス応答の役割を持つオートファジーの誘導を促進して、インフルエンザ感染によるオートファジー機能不全を軽減する
- ・インフルエンザ感染により破綻した解糖系－ミトコンドリア間の細胞内エネルギー代謝の恒常性を改善する

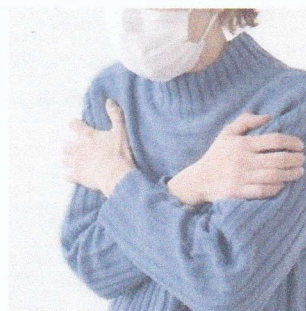
感染前に補剤を投与しておくことで、免疫システムが立ち上がるまでの時間を短縮し、さらに過剰になった炎症を抑制し、COVID-19重症化予防につながると推測されます。

軽症患者（肺炎症状なし）の重症化予防（1）悪寒があれば＝麻黄剤

【患者さんの状態を八綱（はっこう）で診断する】

本連載の第7回（[葛根湯だけじゃない！引き始めのかぜにこの漢方](#)）でもご紹介しましたが、漢方では患者さんの状態を

表裏（ひょうり）＝表 or 裏＝2通り：細菌やウイルスが侵入している身体の部位
寒熱（かんとつ）＝寒 or 熱＝2通り：身体が冷えているか熱くなっているか
虚実（きょじつ）＝虚 or 実＝2通り：病気を跳ね返す力



のそれぞれに分け、 $2 \times 2 \times 2 = 8$ 通りの病態＝八綱（はっこう）に分類して診断します。体の表面（首筋や背筋など）を「表（ひょう）」と呼び、深部（肺・消化管など）を「裏（り）」と呼びます。漢方では、細菌やウイルスは体の表面（表）から入ってきて、段々と深部（裏）へ侵入すると考えます。

日本人の場合、かぜの引き始めの八綱は、「ゾクッと悪寒がする」＝表（場合により裏も同時に）が冷えてしまう（寒）ことが多く、患者さんがかぜを跳ね返す力（虚実）に応じて、漢方薬を選ぶことになります。具体的な使い分けは以下のようになります。

とても元気な人（表寒+実）：麻黄湯（まおうとう）
 普通の人（表寒+虚実中間）：葛根湯（かっこんとう）
 虚弱な人（表寒+裏寒+虚）：麻黄附子細辛湯（まおうぶしさいしんとう）
 麻黄の飲めないとても虚弱な人（表寒+虚）：香蘇散（こうそさん）

悪寒、頭痛、発熱、筋肉痛など感染徴候が少しでもあったら、ごく初期の症状を見逃さずに早めに麻黄湯や葛根湯を内服します。熱産生が弱い高齢者は麻黄附子細辛湯が適応となります。

【くすり】

麻黄湯・葛根湯

重症化予防（2）胃腸の不調があれば＝胃薬（香蘇散+平胃散）

【くすり】

COVID-19感染が確定していない時期に、胃腸の不調があれば

中医学では

藿香正气散（かっこうしょうきさん）

日本漢方では、小川恵子氏によると

香蘇散（こうそさん）+平胃散（へいゐさん）で代用します。

重症化予防（3）悪寒を伴わない発熱と倦怠感があれば＝清熱剤

COVID-19感染が確定していない時期に、倦怠感が主な症状で悪寒を伴わない発熱があれば

中医学では

金花清感など日本にない処方

日本漢方では、小川恵子氏によると

黄連解毒湯（おうれんげどくとう）、清上防風湯（せいじょうぼうふうとう）、荊芥連翹湯（けいがいれんぎょうとう）のいずれか、もしくはこれらの組み合わせで代用します。この3剤はいずれも清熱剤です。

今回は、COVID-19の感染予防、そして軽症者の重症化予防への漢方を紹介しました。続く後編では、COVID-19患者で重症化の徴候が見られた場合に処方する、漢方薬（総合COVID-19漢方薬）を取り上げます。



【くすり】

【くすり】

© 2006-2020 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.

【くすり】

【くすり】

【くすり】

【くすり】

【くすり】

【くすり】

【くすり】

【くすり】

【くすり】

【くすり】

【くすり】

【くすり】

【くすり】

【くすり】

竹田貴雄の「からだところと人間関係に効く漢方講座」

第10回 新型コロナウイルスへの漢方【後編】

「総合COVID-19漢方薬」はどうコロナと闘うか

2020/05/13

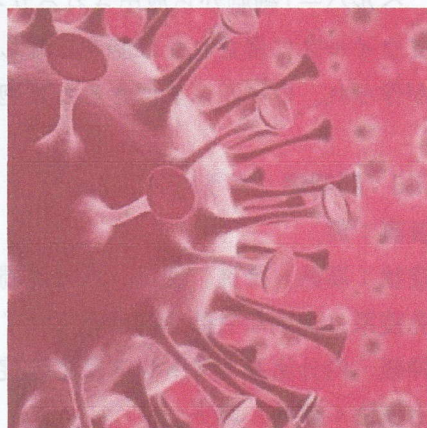
竹田 貴雄（北九州総合病院麻酔科部長）

前回、漢方による新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染予防、そして軽症者の重症化予防として、悪寒、胃腸の不調、倦怠感などがある場合に用いる漢方についてそれぞれ取り上げました。今回は、重症化の徴候が見られた場合、コロナウイルスに対処するための「総合COVID-19漢方薬」について詳しく見ていきましょう。

重症化の徴候があれば＝総合COVID-19漢方薬

【患者さんの状態を病位（びょうい）で診断する】

漢方では、病原体は身体の表面から入って、次第に身体の中心部に侵入すると考えます。細菌やウイルスが身体の中のどの部位に侵入しているかにより病位（ステージ分類）を診断します。



通常の感染症では、
太陽病※1（身体の表面）→少陽病※2（身体の間地点）→陽明病※3（身体の中心部）

と病期が進行していくと考えられていますが、新型コロナウイルスやCOVID-19のような強力なウイルスは、体の表から裏に進んでいくスピードが速く、初期から一気に身体の中心部まで炎症を起こすと考えられています。時に強力なウイルスを排除しようとして、あまりにも強い炎症が急激に起こり、サイトカインストームが起こります。陽明病とは、酸素化が数時間以内に低下して急変するような状況です。

※1 太陽病（たいようびょう）

表裏：表

症状：頭痛、関節痛、悪寒、発熱

免疫系：Tリンパ球によるウイルス貪食

神経内分泌系：交感神経系亢進、ノルアドレナリン分泌

治療法：解表（げびょう：汗をかかせる）

漢方薬：麻黄剤

樹状細胞は病原体の断片を見つけると、抗原提示能を発揮してナイーブT細胞に情報を伝えます。ナイーブT細胞はヘルパーT細胞に変化し、全身に警告信号を発します。これにより免疫システムが立ち上がり、病原体への総攻撃が始まります。ヘルパーT細胞から放出されるサイトカインにより指令を受けたキラーT細胞が、ウイルスに侵された細胞を丸ごと破壊します。マクロファージもヘルパーT細胞による刺激を受けて活性化し、キラーT細胞によって攻撃された細胞やウイルスを貪食します。

※2 少陽病（しょうようびょう）

表裏：半表半裏

症状：弛張熱（1日の中で、高熱と平熱が交互に表れる状態）、味覚障害、嗅覚障害、胃腸障害、咳が止まらない

免疫系：Bリンパ球による抗体産生

神経内分泌系：コルチゾール分泌

治療法：和解（身体のバランスを整える、過剰な炎症を抑える）

漢方薬：柴胡剤（小柴胡湯、柴陷湯）

ヘルパーT細胞から放出されるサイトカインにより指令を受けたB細胞が、抗体を作ってウイルスに侵された細胞を攻撃します。病原体の侵入から数日経ってインターフェロンが作られ、ウイルスに侵された細胞を攻撃します。

※3 陽明病（ようめいびょう）

表裏：裏

症状：高熱、肺炎、便秘、意識混濁

免疫系：過剰な生体防御反応（サイトカインストーム）

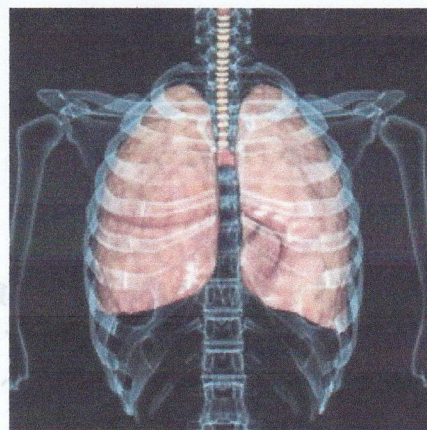
神経・内分泌系：ストレス反応破綻

治療法：清熱、瀉下

漢方薬：清熱剤、承氣湯類（下剤）

表も裏もいっぺんにやられるCOVID-19

上気道粘膜（半表半裏）にレセプターを有するインフルエンザと異なり、レセプター（アンジオテンシン変換酵素2 [ACE2]）が肺や腸（裏）に発現しているCOVID-19は症状に乏しく、気が付かないうちに重症化して治療時期を逸する可能性があります。気が付いた時には肺や腸でひどい炎症を起こしています（裏熱）ので、発熱を認めた時点で、麻黄湯や葛根湯では治療が追い付かなくなります。この場合、表も裏もいっぺんに治療する総合COVID-19



- ・十全大補湯（じゅうぜんだいほうとう）
- ・人參養榮湯（にんじんようえいとう）
- ・加味帰脾湯（かみきひとう）

2. 軽症患者（肺炎症状なし）の重症化予防

患者さんの状態を八綱（はっこう）で診断する。ただし、発病したときには既に肺炎が始まっていることがあるので、要注意。

- ・悪寒があれば＝麻黄剤（麻黄湯 [まおうとう]、葛根湯 [かっこんとう]、麻黄附子細辛湯 [まおうぶしさいしんとう]、香蘇散 [こうそさん]）
- ・胃腸の不調があれば＝胃薬（香蘇散 [こうそさん] + 平胃散 [へいいさん]）
- ・倦怠感が主な症状で悪寒を伴わない発熱があれば＝清熱剤（黄連解毒湯 [おうれんげどくとう]、清上防風湯 [せいじょうぼうふうとう]、荊芥連翹湯 [けいがいれんぎょうとう]）

3. 罹患したら総合COVID-19漢方薬

発熱を認めた時点で、麻黄湯や葛根湯などの解表剤ではウイルスの増殖に間に合わないことがある。総合COVID-19漢方薬で免疫システムを立ち上げ、炎症の役目が終わったなら、過剰な炎症を素早く鎮め、荒廃した組織を修復する。

- ・日本版総合COVID-19漢方薬
柴葛解肌湯（さいかつげきとう）＝葛根湯（かっこんとう）＋小柴胡湯加桔梗石膏（しょうさいことうかきぎょうせっこう）＝葛根湯（かっこんとう）＋小柴胡湯（しょうさいことう）＋桔梗石膏（きぎょうせっこう）
- ・中国版総合COVID-19漢方薬
清肺排毒湯（せいはいはいどくとう）＝麻杏甘石湯（まきょうかんせきとう）＋小柴胡湯加桔梗石膏（しょうさいことうかきぎょうせっこう）＋胃苓湯（いれいとう）

前回と今回の2回に分けて新型コロナウイルスへの漢方をご紹介しましたが、関連する内容として、本連載の第3回（かぜやインフル予防に「補中益氣湯」がオススメ）および第7回（葛根湯だけじゃない！引き始めのかぜにこの漢方）も併せてお読みください。また、日本感染症学会のウェブサイトなどに公開されている、COVID-19への漢方治療に関する寄稿などもご参照ください。

・小川恵子. COVID-19感染症に対する漢方治療の考え方（改訂第2版）. 日本感染症学会特別寄稿.

・有田龍太郎ほか. 中国におけるCOVID-19に対する清肺排毒湯の報告. 日本感染症学会寄稿.

・渡辺賢治ほか. 【緊急寄稿】新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に対する漢方の役割. 日本医事新報. 2020;5008:44

【平胃散（へいいさん）】

構成生薬：朮（じゅつ）・厚朴（こうぼく）・陳皮（ちんぴ）・生姜（しょうきょう）・大棗（たいそう）・甘草（かんぞう）

いわゆる漢方胃腸薬です。胃もたれを改善します。

【五苓散（ごれいさん）】

構成生薬：沢瀉（たくしゃ）・朮（じゅつ）・猪苓（ちょれい）・茯苓（ぶくりょう）・桂皮（けいひ）

利水剤の代表薬です。水分の分布異常（水滞：すいたい）に対して、余った場所から不足した場所に水を移動させます。アクアポリン（水輸送蛋白）を介して循環血漿量を保つ効果があります。

【胃苓湯（いれいとう）】

構成生薬：朮（じゅつ）・厚朴（こうぼく）・陳皮（ちんぴ）・生姜（しょうきょう）・大棗（たいそう）・甘草（かんぞう）・沢瀉（たくしゃ）・朮（じゅつ）・猪苓（ちょれい）・茯苓（ぶくりょう）・桂皮（けいひ）

平胃散（へいいさん）と五苓散（ごれいさん）の合剤です。

ショック状態になった場合＝茯苓四逆湯（ぶくりょうしぎゃくとう）

人工呼吸やECMOなどの治療の甲斐なく、全身状態が悪化していく臨死期を、漢方では厥陰病（けっちんびょう）と言います。四肢が冷たくなり、脈が沈んでとても弱くなった状態、Aラインなどとても入れることのできない状態が、厥陰病です。西洋薬ではカテコラミンを使用する時期ですが、漢方薬にも「カテコラミン」的な働きをする茯苓四逆湯（ぶくりょうしぎゃくとう）というお薬があります。茯苓四逆湯はエキス剤にはないので、

茯苓四逆湯＝人参湯（にんじんとう）＋真武湯（しんぶとう）

で代用します。「寒い、寒い」と言いながら急変し、挿管管理となっている患者さんには、経鼻胃管や経管栄養チューブから人参湯（にんじんとう）＋真武湯（しんぶとう）を投与することで延命効果が得られる場合があります。

COVID-19に対する漢方治療 まとめ

1. 予防が原則

罹患したらいち早く免疫システムが立ち上がる準備状態を、補剤で作っておく。

【補剤（ほざい：エネルギー補給）】

・補中益氣湯（ほちゅうえっきとう）

中国版総合COVID-19漢方薬：清肺排毒湯（せいはいはいどくとう）

軽症から重症を広くカバーする中国版総合COVID-19漢方薬

清肺排毒湯（せいはいはいどくとう） = **麻杏甘石湯（まきょうかんせきとう）** + **小柴胡湯加桔梗石膏（しょうさいことうかききょうせつこう）** + **胃苓湯（いれいとう）**

方意：冷やす麻黄剤 + 小柴胡湯 + 清熱剤 + 胃薬 + 利尿剤

清肺排毒湯は、COVID-19に対する中医薬として創薬されました。

構成生薬：麻黄（まおう）9g、炙甘草（しゃかんぞう）6g、杏仁（きょうにん）9g、石膏（しょうせつこう）15～30g、桂枝（けいし）9g、沢瀉（たくしゃ）9g、猪苓（ちょれい）9g、白朮（びやくじゅつ）9g、茯苓（ぶくりょう）15g、柴胡（さいこ）16g、黄芩（おうごん）6g、姜半夏（きょうはんげ）9g、生姜（しょうきょう）9g、紫菀（しおん）9g、冬花（とうか）9g、射干（やかん）9g、細辛（さいしん）6g、山薬（さんやく）12g、枳実（きじつ）6g、陳皮（ちんぴ）6g、藿香（かつこう）9g

石膏を15gにしたとしても、合計196gもの生薬を煎じて内服します。日本人が内服するとしたら、3分の1くらいの量でよいのではないのでしょうか。

小川恵子氏によると、清肺排毒湯（せいはいはいどくとう）を日本で処方可能なエキス剤で作ると、

清肺排毒湯（せいはいはいどくとう） = **麻杏甘石湯（まきょうかんせきとう）** + **小柴胡湯加桔梗石膏（しょうさいことうかききょうせつこう）** + **胃苓湯（いれいとう）**

となります。全身の熱を下げ、サイトカインストームと臓器障害を予防しながら炎症を抑え、肺で大量に発生する分泌液を痰や尿として排出させる処方と考えられます。ちなみに、**胃苓湯（いれいとう）**は**平胃散（へいいさん）**と**五苓散（ごれいさん）**の合剤です。

【麻杏甘石湯（まきょうかんせきとう）】

構成生薬：麻黄（まおう）・杏仁（きょうにん）・甘草（かんぞう）・石膏（せつこう）
昔から喘息の治療薬として有名な方剤です。麻黄は身体を温める生薬ですが、身体を強烈に冷やす石膏と合わせると、身体を冷やし、気道の炎症と浮腫を取る効果が出ます。また、麻黄は杏仁と合わせると、痰を取り除いて鎮咳作用を示すようになります。

【小柴胡湯加桔梗石膏（しょうさいことうかききょうせつこう）】

構成生薬：柴胡（さいこ）・黄芩（おうごん）・人参（にんじん）・半夏（はんげ）・生姜（しょうきょう）・大棗（たいそう）・甘草（かんぞう）・桔梗（ききょう）・石膏（せつこう）

少陽病と陽明病にまたがった病態に有効な方剤です。気道の炎症を取りながら過剰な免疫反応を抑える和解剤としての効果と、身体を冷やす清熱剤としての効果があります。

漢方薬である柴葛解肌湯（さいかつげきとう）や清肺排毒湯（せいはいはいどくとう）が適応になります。

日本版総合COVID-19漢方薬：柴葛解肌湯（さいかつげきとう）

表から裏まで広くカバーする日本版総合COVID-19漢方薬

柴葛解肌湯（さいかつげきとう）＝葛根湯（かっこんとう）＋小柴胡湯加桔梗石膏（しょうさいことうかききょうせっこう）

もしくは柴葛解肌湯＝葛根湯（かっこんとう）＋小柴胡湯（しょうさいことう）＋桔梗石膏（ききょうせっこう）

方意：温める麻黄剤＋小柴胡湯＋清熱剤

柴葛解肌湯は、1918～1920年にスペイン風邪（インフルエンザ・パンデミック）が流行した際、初期から高熱を出す患者に処方して多くの人命を助けたと言われている漢方薬です。

エキス剤では葛根湯（太陽病：かぜの初期の薬）、小柴胡湯（少陽病：かぜの亜急性期の薬）、桔梗石膏（陽明病：清熱剤）を組み合わせ一緒に服用します。もしくは、葛根湯と小柴胡湯加桔梗石膏（少陽病と陽明病にまたがった病態に有効な方剤）を組み合わせ一緒に服用するのもいいでしょう。

柴葛解肌湯は初期から一気に身体の中まで炎症を起こすような強いウイルスに有効とされています。発熱の勢いが強く、麻黄湯や葛根湯では解熱しない場合、小柴胡湯加桔梗石膏を追加した柴葛解肌湯（さいかつげきとう）が適応となります。

【柴葛解肌湯】

構成生薬：葛根（かっこん）・麻黄（まおう）・桂枝（けいし）・生姜（しょうきょう）・大棗（たいそう）・芍薬（しゃくやく）・甘草（かんぞう）・柴胡（さいこ）・黄芩（おうごん）・人参（にんじん）・半夏（はんげ）・桔梗（ききょう）・石膏（せっこう）

麻黄と桂枝で身体を温めながら悪寒を改善し、葛根で頭痛、関節痛を改善する葛根湯（かっこんとう）と、和解剤としての気道の炎症を取りながら、過剰な免疫反応を抑える効果と、清熱剤としての身体を冷やす効果がある小柴胡湯加桔梗石膏（しょうさいことうかききょうせっこう）を合わせた構成生薬となります。